

恩師・末永弘海先生召天 50 年を記念して(2)

姫路あけぼの教会牧師 廣田守男

末永弘海先生の牧会の秘訣

1. 祈りに徹しられた器。 先ず祷告名簿を作り、離散した教会員を覚えてリバイバルを祈られた。また断食祈祷をされている最中に、聖霊の導きを受けられ、市内教会を訪問してお詫びをされ、和睦を求められた。
2. 教会形成に尽力された。 最初は定期集会として、礼拝、伝道会、祈祷会を守られ、早天祈祷会を行っておられた。その後、感謝会を持ち、愛餐会を行い、リバイバル祈り会をされるようになられた。続いて必要に応じ組織を確立された。先ず役員会を設け、組会、家庭集会、出張伝道を行われ、牧羊会、各部連絡委員会などを設けられた。
3. 聖霊のバプテスマを求められた。 自ら断食祈祷をして求められた。その結果「信仰によって」が鍵であることを示された。ペンテコステ礼拝を前に毎年「ペンテコステ待望会」を開かれた。聖霊の感化を受けることと聖霊に満たされることとは違うことを強調される。
4. イエス・キリストを主と崇め、栄光を主に帰する生涯を送られた。 活水学院が解散した後、山手教会にて修行されるように導かれた時、みことばを与えられた（ヘブル 12 章 2 節、コロサイ 2 章 3 節）。また牧会 30 年の感謝会の時にすべての栄光を主に帰しておられた（詩篇 115 篇 1 節）。その姿勢は生涯、変わられなかった。
5. 神癒の信仰について律法的になるのではなく、福音的に導かれた。
6. 聖書を通読することを教会員に奨められた。
その手助けに、「朝ごとのマナ」と「一日一章」を執筆される。

献身の際、京都から、ご両親に宛てて送られた手紙

「私の献身についてその後段々と教えられまして、いよいよこの度こそどうしてもご両親のみ許しを得て進みたく決心いたしました。『鋤に手をつけて後を省みる者は神の国に適わざる者なり』。死にし者の葬ひすらお許しなさらなかったことを思います時に、最早ぐずぐず致している時ではないと明白に教えられましたので、郵便局のことや会堂建築を控えて、去って行きますことは誠にお父様に申し訳なく存じますが、この際私が急死いたしましたとお考え下さって、何とかならぬものでしょうか。宮崎の山に於いても甲南病院に於いても、既に私は死んでいた筈の者が『神様の為に生きるように』活かして頂いたことを思います時に、主の日の近い今日、一日でも遅れることはお父様に申し訳ないよりもっと主に対して申し訳ない事を思いまして、此の度は此の儘此の地から献身生活に入る事に決心致しました。

今後は全く神の御導きに従って歩むのですから、地の極まで証人として立つ私の歩みに対して何卒一切神の御手にお委ね申して下さいませ。裸になる事と肉性が働かない修養の為には、どうしても落合が適当だと思いますから、ひと先ず其の処にて尚今後の使命に就いても神様が如何なる道に又方法を以て御用に御当て下さるか示されてから従い度く存じて居ますので、神が牧師として用い給うのであるか、又何れの地に遣わして下さいるのであるか全く未知の問題ですから、何卒今後の私の歩みに付きましては一切主にお委ね下さいますよう、呉々御願い申し上げます。何卒門出の祝いとして、御両親のお与えられなさいました聖言を御打電下さいませ、切にお待ち申し上げて居ます。宮崎又は甲南病院で私は既に死んでいた者とお考え下されば、萬事は御解決下さると信じます。」

(母末永雪「お父様の思い出の記」に中に掲載)